

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

令和4年 6月 6日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	八鍬聖

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
宮崎県・幸島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
幸島実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2022年 5月 9日 ~ 2022年 5月 15日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター附属幸島観察所、鈴木 崇文氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
野生動物を対象とした生態学・行動学的な研究の基礎について学ぶことを目的として、幸島観察所において7日間の実習を行った。本来であれば、幸島で4日間にわたってサルを観察する予定であったが、非情にも雨が降り続いたため、幸島に渡り、サルを観察できたのは最後の2日間のみであった。そのため最初の5日間は、観察所周辺の山を探索したり、都井岬にて半野生馬の観察を行なった。
スケジュール 5/9(月): 観察所に到着、観察所付近でカメラトラップの設置。 5/10(火): 都井岬にて半野生馬の観察。 5/11(水): 観察所周辺の山を探索。日南海岸付近にてハマナツメを捜索 5/12(木): 宮崎県総合博物館を観覧。 5/13(金): カメラトラップを回収。データの整理。 5/14(土): 幸島に移動、サルの観察。 5/15(日): サルの観察、撤収。
今回の渡航では、幸島以外で過ごす時間が長くなったが、その分多くの経験をする事ができた。当初の実習の目的とは少しずれてしまっているものの、雨に感謝を感じるくらいの、非常に充実した有意義な時間であった。
1日目は観察所に到着後、観察所付近の林内にカメラトラップを仕掛けた。私は、おそらく付近の住人がたまに利用しているのであろう、他の場所と比べると草木が踏みならされている地点にカメラを設置した。野生動物も通り道として利用していると考えたからである。4日後にカメラを回収しデータを確認した結果、写っていたのは意気揚々とカメラを設置する私の姿だけであった。しかし、同期の学生の設置したカメラにはイノシシが写っており、カメラを適切な場所に設置することの大切さと難しさを学んだ。
2日目は都井岬にて、半野生の状態で棲息するミサキウマの観察を行った。近くで見るとウマの筋骨隆々とした体は非常に美しかった。ウマは大半の時間を数センチの草を食べることに費やしており、ヒトに餌を与えられずにこのような大きな体を維持していくことは簡単なことではないと認識した。また、自分自身の力ではハーレム構造を全く識別できなかった。
3日目は、観察所周辺の山を探索した。何種類ものカニやカエルがいたほか、山の中腹ではイノシシのものと思われる骨が見つかった。また、下山途中にはニホンアナグマと思われる動物が目の前を横切っていった。このように、都市部では決して味わうことのできない日本の生物多様性を感じた。また、午後には日南海岸付近でハマナツメの捜索を行った。小さな池のような場所にハマナツメは群生しており、根の一部は水中に隠れ、一部は地表に出ていた。幹には鋭い棘が生えていた。
4日目は宮崎県総合博物館を観覧した。私自身、動物園以外の博物館を訪れた経験がほとんどなかったため大変新鮮であった。自然史の展示を見るのにかなり時間をかけてしまい、歴史や民俗展示を見る時間を十分に取れなかった。大変心残りである。また宮崎に行く機会があれば訪れたい。
5日目は、前述したようにカメラトラップを回収し、皆でマップに情報を共有した。回収の際に、野生のサルを見ることができた。ヒトが近くにいてもとどまるようなことはせず、すぐに林の中に姿を消した。

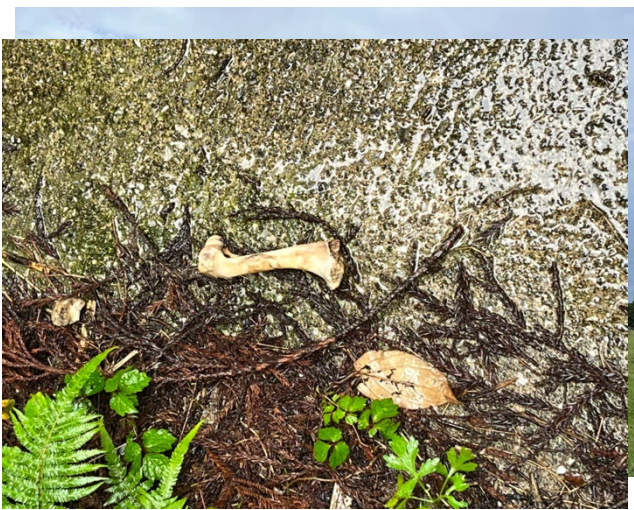
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

6日目は、ついに幸島に渡ることができた。最初に幸島のサルを見たとき、以前に見た嵐山のニホンザルよりも引き締まった体をしているように感じた。鈴木さんが撒いた麦を食べた後しばらくは浜辺付近でくつろぐものの、昼過ぎあたりには徐々に森に姿を消していくのも、決まった生活リズムがあるようで興味深かった。午後には、山に入りサルの観察を行った。何も整備されていない山道を登るのは想像していたよりもはるかに難しく、動物を追いながらだとさらに難しいだろうと感じた。山の中で観察したサルは浜辺にいるときよりも野生動物らしい姿を見せてくれ、一人のサル好きとして、とても嬉しかった。しかし、山の中ではサルが群れという単位で行動していなかったように思い、鈴木さんに尋ねたところ、我々が追っていた主群は、群れがかなり広がって行動しているということであった。

サルがグルーミングをされる際に、まずは横向きから始まり、次は左手を上げて仰向けになるといったふうに、決まった順序があるように感じ、観察テーマとした。しかし、テーマ設定後、観察できたサンプル数が十分ではなく、結論は得られなかった。だが、観察テーマを自分で設定し、そのために自分の足で動き、データを集めるというフィールドワークの一面を体感できた、大変素晴らしい機会であった。

今回の実習では、1週間の間に多くの体験をすることができ、大変充実していた。また、フィールドワークの肉体的・精神的な厳しさを知り、自分がどれだけ甘く考えていたかを知ると同時に、野生動物の姿を自分で見つけて追いかける楽しさも十分に知れたように思う。



ミサキウマ

観察所の近くの山で見つけた野生動物の骨



ハマナツメの幹



グルーミングをするニホンザル

6. その他 (特記事項など)

本実習に参加するに当たって、あいにくの天気にも関わらず、非常に充実した実習のスケジュールを立案し、補助していただきました杉浦氏、鈴木氏には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)